
想イ配達人

キラワケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想イ配達人

【Nコード】

N0913U

【作者名】

キラワケ

【あらすじ】

寒空の下を雪を踏みしめながらも、あるものを届ける為に歩き続ける配達人がいた

「さむ」

吹き抜ける寒風に身を縮こませる男が道を一人歩いていた。

男は毛皮で出来たあちこちに穴や傷のある紺のコートを着て、毛糸で編みあげられた茶色のセーターを身につけ。

手にはまたまた毛糸で編んだベージュに茶色の一本線が入った手袋をはめ、A5サイズで少し厚みのある黒く四角い皮で出来たシヨルダー鞆を下げている。

「……」

男は歩みを進めている。

空は厚く灰色の雲が占め、太陽の明かりや空の青色を望むことは叶わない。その雲からは白く冷たいものが降り注ぐ、男の体を凍えさす一つの要因でもある。

雪。

水っ気がなくかなり乾燥した雪だ。それはかつてのアスファルトを純白の絨毯へと変える。それは時が経つに連れ厚みを増し続けていた。

男の履いた長靴はサクサクと軽快な音を上げ、かつて歩いた道に跡を残す。サクサク、サクサク、サクサク、サクサク。

「……」

音は止まっていた。男が立ち止まっていたのだった。

男の目の前には何処にもある二階建ての一軒家。各窓は雨戸で覆

われ、ちよつとした屋根があり奥まった場所にある玄関のみが顔を覗かせていた。

サクサク。門から玄関までの僅かな距離を歩くと
ピンポン。雪降りしきる空の下で明るい音が鳴った。

男の右手の人指し指は呼び鈴の小さな四角いボタンに触れている。
少し……数十秒経った後に、ガチャという音とともに重厚な扉が開いた。

「どちらさまですか？」

五十代前半であろう女性が顔を出す。

「草川亜紀様でよろしいですか？」

思いのほか高い声の男がそう尋ねる。

「はい、合ってますけど」

「お届け物です」

「あ！ 配達員の方ですか？ 寒い中大変でしょうに？ すみませ
んねえ」

「いえいえ、それで草川様へのお届け物はというと」

彼は掛けているポシェット以外は手持ち無しだった。そのポシェットに手紙でも入っているのだろう。おそらく女性はそう思ったのだと思う。

しかし彼は

「声です」

彼は、そんなことを言い放つ。

そんな自分には他人と違う特徴があった。

それは声。

まずは自分の声を持っている、その他にもまた自分の声を持っているのだ。モノマネと言ったら陳腐な 気もするが、僕は声真似をすることができる。

他人の声を聞き取り、その人の声質を音域などを合わせて再現する。要するに僕は非常に音域が広いわけで、その音域を最近は自由自在に制御出来る。

その身体的特徴を生かして僕は、この仕事をしていると言えよう。そんな僕の話はさておいて

「声……ですか」

かなり女性は不審に思い始めていた。

それはそうだろう、いきなり声がお届けものと言われても、明らかに不審で何か怪しく感じるのが当たり前だ。

「草川卓也様に配達を依頼されました」

「たくちゃ……」

女性はおそらく呼んでいただろう息子の名前を思わず漏らしていた。そう、依頼人はこの女性の息子だった。

「……なんで私の息子の名前を？」

「配達員ですから、実際本人に依頼されましたし」

次第に女性の不信感が強まっている。

「僕ごと配達員は、声を届ける仕事です」
「……電話で済む話じゃないの？」

まあ言っていることは分かりますとも。今は戦国時代でも江戸時代でもない、電話という便利な文明の利器が存在する。更にはインターネットという情報端末もある。

そんな時代に、声を届けるという酷いぐらいのアナログをやるうとしている。胡散臭いなあ。……そう思っているに違いない。

「依頼者の希望ですから、配達員としては受け取ってもらわないと困ります」

「……」
「もちろん料金は徴収しませんし、個人情報をお教え頂く必要もありません」

「……」
「自分は声をお届けし終わり次第、帰らせて頂きますので」
「……寒いでしょう、玄関に入ってもいいですよ？」

少し不服そうだが承諾してくれた。

「では、失礼して」

そうして玄関に入れて貰う。

「上がりませんか？」

「いえ自分は大丈夫です。でも草川様に何か不都合があれば」

「……特にないけど、時間はどれほど？」

「ほんの数分でおいとまさせて頂きますから……それでは目を閉じてくれますか？」

「な、何をするつもり？」

「ただ、声を届けるだけです。自分の顔をみたら台無しですから」
「……何かしたら警察に突き出しますから」

まあそんな物騒なご時世ですからね、承諾してくれただけでもかなり良い方ですよ。

「あー、あー……では」

ポケットからその声にする文章が書かれた紙を取り出す。

そして四つ折りにしていた紙を広げ、僕の目の前には読むための文章が書き連ねられている。

さあ、これからが僕の仕事だ。

『母さん元気？』

「え」

女性は思わず声を漏らした

『病気とかしてない？』

「……」

『まあこういうのは電話でも聞けるよな、俺はなんとかやってるよ。東京はそっちと全然違うけど、こっちにもなんとか慣れてきたんだ。今の頃は雪が積もってるかな、こっちは肌寒いだけなんだよね。仕事は……ごめん。まだ見つかってないんだ。今はコンビニとファミレスでアルバイトしてる。アルバイトも大分出来るようになってきたからさ、また就職にトライしてみるよ。あと仕送りありがとう、竹の子の缶詰美味しかった。また今年も帰れそうにない、でも仕事』

見つけてある程度稼げるようになったら。そつちに顔出すからさ。それまで待つててくれないかな？ あー、文章にすると案外話すことも少ないか。そういうものなのかもしれないな、それで最後に

『

『あの時笑顔で送りだしてくれてありがとう』

『父さんはすごい反対してたけど、母さんの説得でどうにか上京できたよ。俺頑張るからさ、母さんも体に気をつけて。あ、父さんにもよろしく頼むな。本当にありがとう、母さん』

「目を開けても大丈夫ですよ」

「……っ」

「……以上が草川卓也さんの声です」

「本当の……たくちゃんみたい……」

「僕の仕事は声を届けることですから」

と言つて微笑んでみる。この女性の反応を見るからに、それなりに仕事は出来たようだ。

「っ」

タイミングが重なっただけで特に意味はないと思うが、その女性は目に涙を溜めていた。

「僕は配達員ですので、お届け完了後この内容にはこれ以上関与しません。ということとで、ご利用ありがとうございました。これにて僕は失礼させて頂きます」

そして自分は踵を返し玄関をガチャリと開けると、かつての道に戻って行く。

「え、えと！ 先程は本当に失礼しました！ あの……あなたのお名前……いえ配達会社だけでも教えてくださいますか！」

かつての不信感を抱いていた女性の姿は無く、ただその配達員に叫ぶ女性がそこには居た。その叫びに自分は立ち止まり

「会社は”雨野配達業” 僕の名前は 時川アスです」

そう自分は答えると、雪空の下の世界へ消えて行く。

「ありがとうございます、配達員の時川さん。 息子の……たくちやんの声をありがとうございます……」

その女性の声は降り続ける雪に抗うことは出来ず、配達人の彼にその声が届くことはなかった。

「さむ」

吹き抜ける寒風に身を縮こませる男がかつて歩いてきた道に戻っていた。男は歩みを進める。

空には相変わらず厚い雲が広がり、この地上に太陽の光や空の青色が届くことはない。そしてその雲からは依然として白く冷たいものが降り注ぐ。

雪は降り続けている。そして男も来た道を歩き進めている。

男は配達員。彼は声の配達人。声に乗せて依頼者の”想い”を届ける。それが彼の仕事

『想イ配達人』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0913u/>

想イ配達人

2011年6月15日00時22分発行